

1 五十音図

五十音図の「行」と「段」は古文学習の基礎の基礎よ。しっかり学んでね。また、うすあみ文字はなぞり書きして覚えましょう。



五十音図の「行」と「段」

日本語の基本的な音を配列した表を、**五十音図**という。古語の五十音図は左ページの通りであり、これが古文に使われているかなづかいを読む基本となる。

(1) 縦の列を**行**といい、ローマ字で書くと、同じ**子音**が並ぶ。

例 力行：か(ka)、き(ki)、く(ku)、け(ke)、こ(ko)

(2) 横の列を**段**といい、ローマ字で書くと、同じ**母音**が並ぶ。

例 ア段：あ(a)、か(ka)、さ(sa)、た(ta)、な(na)……

(3) 古語の五十音図では、特に**ヤ行**と**ワ行**に注意する。

① 「い」と「え」は**ア行**と**ヤ行**の二つの行にある。

② 「う」は**ア行**と**ワ行**の二つの行にある。

③ **ワ行**には「ゐ」と「ゑ」がある。

(4) **ザ行**は「ざ、じ、ず、ぜ、ぞ」となり、

ダ行は「だ、ぢ、づ、で、ど」となる。

大切だよ！



←左ページへ→

確認稽古①

次の各文の()に、適切な語句か、ふさわしいものを選び、記入しなさい。

解答欄					
(4)	(3)	(2)		(1)	
	①	③	①	③	①
	②	④	②	④	②

(1) 五十音図は、日本語の基本的な音を配列した表である。

縦の列を(①)といい、同じ(②)**母音・子音**が並ぶ。
横の列を(③)といい、同じ(④)**母音・子音**が並ぶ。

(2) 五十音図の中で、「い」と「え」は(①)**行**と(②)**行**の二つの行にあり、「う」は(③)**行**と(④)**行**の二つの行にある。

(3) **ワ行**には、現代語では用いない(①)**や**(②)**の**字がある。

(4) **ダ行**は、「だ、()、づ、で、ど」となる。

←左ページへ→

学習目



【五十音図】

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	行 段
ワ行 わ wa	ラ行 ら ra	ヤ行 や ya	マ行 ま ma	ハ行 は ha	ナ行 な na	タ行 た ta	サ行 さ sa	カ行 か ka	ア行 あ a	ア段
ゐ wi	り ri	い i	み mi	ひ hi	に ni	ち ti	し si	き ki	い i	イ段
う u	る ru	ゆ yu	む mu	ふ fu	ぬ nu	つ tu	す su	く ku	う u	ウ段
ゑ we	れ re	え e	め me	へ he	ね ne	て te	せ se	け ke	え e	エ段
を wo	ろ ro	よ yo	も mo	ほ ho	の no	と to	そ so	こ ko	お o	オ段

「ゐ」という字は「為」という漢字、「ゑ」という字は「恵」という漢字から生まれたのよ。



知っているかな？

古語の発音

平安時代では、ハ行の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、英語の f の音のように「fa・fi・fu・fe・fo」と発音した。また、ワ行の「わ」は「wa」と発音した。よって、ワ行の「ゐ」は「wi」、「ゑ」は「we」と発音した。

確認稽古②

次の一欄表の空欄①～⑫に、古語における五十音の適するひらがなを記入しなさい。

解答欄			
⑩	⑦	④	①
⑪	⑧	⑤	②
⑫	⑨	⑥	③

ダ行	ザ行	ワ行	ヤ行	ハ行	ア行	
だ	ざ	わ	や	は	あ	ア段
(⑫)	(⑩)	(⑦)	(⑤)	(③)	(①)	イ段
づ	(⑪)	う	ゆ	ふ	う	ウ段
で	ぜ	(⑧)	(⑥)	(④)	(②)	エ段
ど	ぞ	(⑨)	よ	ほ	お	オ段

しっかり覚えよう！



2 歴史的かなづかい

わたしの時代の文章を読み解こうと思うなら、
かなの使い方の稽古が必要じゃ。これをいいかげ
んにすると、決して上達はせぬぞ。



かなづかい

現代文に使われているかなづかいを現代かなづかいという。古
文に使われているかなづかいを歴史的かなづかいという。

練習稽古

次の(1)～(8)は、歴史的かなづかいのルールをまとめたも
のである。なぞり書きをして、そのルールを確認しなさい。
また、**訓練**の「」をうめなさい。(訓練1～5の解答はp.11)

- (1) 八行：単語の最初でない「は・ひ・ふ・へ・ほ」の文字は、「わ・
い・う・え・お」となる。

例・あはれ↓あわれ ・おもひ↓おもい ・祝ふ↓祝う

・いにしへ↓いにしえ ・かほ↓かお

訓練1 次の「」にあうひらがなを書きなさい。

- ① かへす↓か「」す ② 笑ふ↓笑「」
③ かは↓か「」 ④ いきほひ↓いき「」
⑤ うぐひす↓うぐ「」す

確認稽古①

次の古語を現代かなづかに直しなさい。

解答欄				
⑬	⑩	⑦	④	①
⑭	⑪	⑧	⑤	②
⑮	⑫	⑨	⑥	③

- ① いらへ ② かは ③ すぢ
④ かほ ⑤ やうす ⑥ には
⑦ をかし ⑧ いふ ⑨ こずゑ
⑩ てふ ⑪ ゆゑ ⑫ じふごや
⑬ せうそこ ⑭ ほのほ ⑮ たふる

確認稽古②

次の——線部の古語を現代かなづかに直しなさい。

解答欄			
(2)		(1)	
③	①	③	①
	②		②

学習目

(2) **ダ行** : 「ぢ・づ」は、ザ行の「じ・ず」となる。

例・はぢ↓はじ・まづ↓まず

訓練2 次の「」にあうひらがなを書きなさい。

① てんぢく↓てん「」く ② きよみづ↓きよみ「」

(3) **マ行** : 「む」は、「ん」となる。

例・やむごとなし↓やんごとなし

(4) **ワ行** : ワ行の「ゐ・ゑ・を」は、ア行の「い・え・お」となる。

例・用ゐる↓用いる・こずゑ↓こずえ

・をとこ↓おとこ

訓練3 次の「」にあうひらがなを書きなさい。

① なむ↓な「」 ② ゐのしし↓「」のしし

③ ゑし↓「」し ④ かをり↓か「」り

(5) **カ行** : 「くわ・ぐわ」は、「か・が」となる。

例・くわんげん↓かんげん (管弦)

・ぐわいじん↓がいじん (外人)

(6) **ア段音+「う・ふ」**

：ア段音+「う・ふ」は、ア段音が同じ行の才段音となる。

解答欄					
(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)
①		①	①	③ ①	①
②		②	②	②	②

(1) ①をとこ、身を②えうなきものに③思ひなして…。

(2) 木の蔭に下り①ゐて、②かれいひ③食ひけり。

(3) 句の①うへに②すゑて、旅の心をよめ。

(4) 野分のまたの日こそ、①いみじう②あはれに③をかしけれ。

(5) ①やうやう白くなりゆく②山ぎは、すこしあかりて…。

(6) 大きなる相あり、その木の①うつほに②ぢゅうして…。

(7) 少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ。

(8) ①くわんぱく殿、黒戸より出でさせ②たまふとて…。

例・やうやう↓ようよう・かうし↓こうし

訓練4 次の「」にあうひらがなを書きなさい。

- ① くわし↓「」し ② ぐわいぶん↓「」いぶん
 ③ かうし↓「」うし ④ さうし↓「」うし
 ⑤ あうむ↓「」うむ ⑥ あふみ↓「」み

(7) イ段音+「う・ふ」

…イ段音+「う・ふ」は、「う・ふ」を、「ゆう」とする。

例・りうぐう↓りゆうぐう(龍宮)

注「り」は、ラ行「ら」の「る」の「イ段音」

・しんにふ↓しんにゆう(進入)

注「に」は、ナ行「な」の「ぬ」の「イ段音」

(8) エ段音+「う・ふ」

…エ段音+「う・ふ」は、エ段音をイ段音にかえて、「う・ふ」を、「よう」とする。

例・てふてふ↓ちようちよう(蝶々)

注「て」は、タ行「た」の「つ」との「エ段音」。それを、タ行の「イ段音」の「ち」にかえる。

・せうそこ↓しyouそこ(消息)

注「せ」は、サ行「さ」の「す」との「エ段音」。それを、サ行の「イ段音」の「し」にかえる。

例外・えう↓よう 例・えうなし↓ようなし(要なし)

訓練5 次の「」にあうひらがなを書きなさい。

確認稽古③

次の「B」の文章は、「A」の文章を現代かなづかいに直したものである。①～⑪の空欄にあてはまる現代かなづかいの形を、例にならって書きなさい。

解答欄			
⑨	⑥	③	例
			う
⑩	⑦	④	①
⑪	⑧	⑤	②

【A】

今は昔、もろこしに、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あ^{わらは}①ひぬ。孔子に問ひ申す②やう、「日の入る所と洛陽と、い③づれか遠き。」と。孔子いら④へ給ふやう、「日の入る所は遠し。洛陽は近し」。童の申す⑤やう、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば、日の出づる所は近し、洛陽は遠しと思ふ⑦。」と申しければ、孔子、「かしこき童なり。」と感じ給ひける⑧。

「孔子にはかく物問ひ⑨ひかくる人もなきに、かく問ひけるは、ただ者にはあらぬなりけり。」とぞいひける⑩。

『宇治拾遺物語』

【B】

今は昔、もろこしに、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あ①「ぬ。孔子に問ひ申す」②「

古語をローマ字で考える

[au・iu・eu] は、それぞれ [ō・yū・yō] に置き換わる。

例

- ・「やうす」[yausu] は、「ようす」[yōsu] となる。
- ・「りうぐう」[riugu] は、「りゅうぐう」[ryūgu] となる。
- ・「せうそこ」[seusoko] は、「しょうそこ」[syōsoko] となる。

(6) (7) (8) には、別の覚え方があるわ。ローマ字が得意な人にお勧めよ。



① しうか↓し「
てうし↓「
し

② けふ↓「
えうなし↓「
なし

知っているかな？

孔子

孔子は紀元前五百年ごろに中国で活躍した思想家であり、人間の生き方や政治のあり方を説いた。こうした教えを儒教と呼び、孔子のことはや行動、

弟子たちとの問答を記録した書が『論語』である。このころ、日本はまだ縄文時代だったことを考えると、孔子がいかに偉大な人物であったかが分かる。

学びて時にこれを
習ふ。またよろこ
ばしからずや。



訳

「日の入る所と洛陽と、い」③「れか遠き。」と。孔子いら
「④「給」⑤「、「日の入る所は遠し。洛陽は近し」。童
の申す「⑥「、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。
されば、日の出づる所は近し、洛陽は遠しと思」⑦「。
と申しければ、孔子、「かしこき童なり。」と感じ給」⑧「
ける。
「孔子にはかく物問」⑨「かくる人もなきに、かく問」
⑩「けるは、ただ者にはあらぬなりけり。」とぞい」⑪「
ける。

今ではもう昔のことであるが、孔子
が道を歩いて行かれたときに、八歳ば
かりの子どもと会った。孔子にたずね
て言うには、「太陽が沈むところと洛
陽の都とは、どちらが遠いのでしょ
うか。」と。孔子がお答えになるには、
「太陽の沈むところが遠いよ。洛陽の
方が近いのだ。子どもが言うには、
「太陽が昇ったり沈んだりするところ
は見える。洛陽はまだ見たことがない。
だから、太陽の昇るところは近く、洛
陽の方が遠いのだと思う。」と申し上
げたので、孔子は、「賢い子どもであ
る。」と感心なされた。
「孔子にはこのように問いかける人
もないのに、このように問いかけるの
は、ただ者ではないなあ。」と言ったこ
とだ。



演習道場

歴史的かなづかい

得点

100

学習日

1 次の——線部を現代かなづかに直しなさい。(各3点、計60点)

解答欄					
①	④	⑦	⑩	⑬	⑯
②	⑤	⑧	⑪	⑭	⑰
③	⑥	⑨	⑫	⑮	⑱

- (1) 春はあけぼの。① やうやう白くなりゆく② 山ぎはすこしあかりて、
むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさ
らなり。やみも③ なほ、ほたるの④ おほく飛び⑤ ちがひたる。
- (2) いろは⑥ にほへと ちりぬるを わがよたれそ つねならむ⑦ う
ゐのおくやま ⑧ けふこえて あさきゆめみし ⑨ ゑいもせず。
- (3) それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑩ うつくしうて⑪ ゐたり。
- (4) 翁⑫ いふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中に⑬ おはするに
て知りぬ。」
- (5) 野分のまたの日こそ、⑭ いみじう⑮ あはれに⑯ をかしけれ。

2 右下へ

訳

- (6) ⑦ さやうの所にてこそ、⑧ よろづに心づかひせらるれ。
- (7) とりつき⑨ たまへる手を引きのけて、船をば⑩ つめにこぎいだす。
- (1) 春は、夜明けがいちばん風情がある。しらじらと夜が明けていき、山際の空が少し明るくなつてきて、紫がかつた雲が細くたなびいているのが、なんとも風情がある。夏は夜が風情がある。月夜のころは言うまでもないが、闇夜でも多くの蛍が飛び交っているのはとても風情がある。
- (2) 美しく照り映えていても、やがて散りおとろえてしまうものだ。この世に誰が生きながらえるであろうか。はかなく移り変わる奥山を今日越えて、浅い夢は見まい。酔つたような生涯は過すまい。
- (3) それを見ると、三寸ほどの人が、とてもかわいらしい様子で座っていた。
- (4) 翁が言うには、「私が朝夕ごとに見る竹の中にいらつしやるので分かりました。」
- (5) 野分の(吹いた)翌日こそ、とてもしみじみとした感じがする。
- (6) そのような田舎では、何事につけても自然と気を使うようになる。
- (7) しがみついておられた手を引き離して、船を遂に漕ぎ出す。



2 次の——線部を現代かなづかいに直して、全てひらがなで書きなさい。(各2点、計40点)

解答欄					
①	②	③	④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
⑲	⑳				

(1) ある夜、まち①はづれをかけり②まはりて、一所③やゑんするを下し見て、もし知れる人にやと近寄りて④見むとするに地に近づけば⑤勢ひ弱くなりて、⑥思はず落ちたりければ、その男女おどろき叫びて逃れ走りける。あとに酒肴⑦さはに残りたるを、幸吉あくまで飲み⑧食ひして、また飛び去らむとするに地よりはたちあがり難き⑨ゆゑ、羽翼をおさめて歩いて帰る。

(2) 主上、維時を召して花の目録を書かして、これを御覧じて、漢字を用ゐるべきよしを仰せらる。維時たちまちにこれを書きてたてまつる時、人一草の字をも知らず、⑩競ひ来たりてこれを⑪問ふ。維時⑫はいく、「かくのごときが⑬ゆゑに、先日は仮名字を用ゐる。何ぞ⑭あざわらはれしや。」と言ふ。

(3) 人々興に入りて、瓶子の酒を⑮てうしに入れて見れば、浮草あ

り。心みれば水なり。「これはいかに。⑯いつかう水にてあるは。」と⑰問へば、「よも⑱候はじ。やがて汲みて候ひつるを。」と⑲いふ。

訳

(1) ある夜、町はずれを飛びまわって、とある場所で夜宴をしているのを見おろして、もしかしたら知っている人だろうかと思つて見ようとしたところ、地面に近づいたので風力が弱くなって、予想外にも墜落してしまつたので、人々は驚き叫んで逃げてしまつた。あとには酒や料理がたくさん残っていたが、幸吉は十分満足するまで飲み食いして、再び飛び去ろうとしたところ、地面からは飛び立ちにくいため、羽をたたくで徒歩で帰つた。

(2) 天皇が、維時をお呼びになつて花の目録を書かせて、これをご覧になつて、漢字を用ゐるべきであるとお命じになつた。維時はすぐさまこれを(漢字で)書いて献上するとき、他の蔵人たちは一つの草の名の漢字も知らず、競ひ合つてやつて来て、これ(読み方)を尋ねた。維時は、「このようなことであるから、先日は仮名を用いたのです。どうしてお笑ひになつたのですか。」と言つた。

(3) 人々は盛り上がり、徳利の酒を銚子に入れてみると、浮き草が混じつていた。試しに飲んでみると、水であつた。「これはどうしたことか。まったく水ではないか。」と尋ねると、「まさかそんなことはないでしょう。すぐに汲みましたのに。」と答えた。

P. 619 問題の解答

- ① ①え ②う ③わ ④おい ⑤い ② ①じ ②ず ③ ①ん ②い
③え ④お ④ ①か ②が ③こ ④そ ⑤お ⑥おう ⑤ ①ゆう
②きよう ③ちよう ④よう